

【ポスター発表】

バリデーションを用いた地域住民対象の研修プログラムがもたらす 認知症高齢者に対するイメージの変化に関する研究

○ 関西福祉科学大学 家高 将明 (7811)

米澤美保子 (神戸親和女子大学・7409) 三田村知子 (関西女子短期大学・8727) 都村尚子 (関西福祉科学大学・3861)

〔キーワード〕 バリデーション、認知症高齢者のイメージ、地域住民

1. 研究目的

近年、認知症サポーター100万人キャラバン事業がすすめられ、2015（平成27）年1月に発表された「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）」において、7つの柱の一つとして「認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進」が掲げられるなど、地域住民を対象とした認知症への理解を深めるための普及・啓発活動が行われている。

認知症とは、複数の認知機能の低下から記憶や判断が難しくなるとともに、コミュニケーションにも困難を抱える疾患である。このことは認知症高齢者のみならず、彼らを取り巻く人たちにとっても関わりや理解に困難を抱える要因となる。よって上述した普及・啓発活動を実施するにあたって、コミュニケーションの側面から認知症高齢者を理解することが重要となる。

本研究において着目するバリデーションは、認知症高齢者とのコミュニケーション法であり、コミュニケーション技術だけでなく、それを実践するための態度や理論を伴った方法である。そのため、一般的に行われる普及・啓発活動にバリデーションに関する講座を組み合わせせた研修を実施することが、受講者における認知症高齢者への理解をより促進させる可能性がある。そこで本研究は、両講座を組み合わせせた研修を実施し、その受講者の認知症高齢者に対するイメージの変化を捉え、両講座を組み合わせせた研修の効果を検証する。

2. 研究の視点および方法

本研究では、認知症サポーター養成講座に参加した地域住民を対象に調査を実施した。調査を実施した地域は大阪府1市、兵庫県3市で、調査対象は研修参加者のうち、介護現場での介護経験及び家族介護の経験のない169名とした。調査は集合調査法にて実施し、研修前及び研修後に実施した。調査期間は、2014（平成26）年8月～11月で実施した。調査内容は性別、年齢などを尋ねる基本属性以外に、認知症高齢者のイメージを問う自由記述の設問を設定した。また本調査においては、上記以外に、「Q1:あなたは、認知症高齢者を理解していると思いますか」「Q2:認知症高齢者への関わり方がわかっていると思いますか」「Q3:認知症高齢者に接することへの不安は感じますか」などの項目を問う設問を設定しているが、本研究では認知症高齢者のイメージを問う自由記述の回答に限定して分析

を行う。

分析方法は、認知症サポーター養成講座にバリデーションに関する講座を組み合わせた研修（以下、研修 A とする）と、認知症サポーター養成講座のみを行う研修（以下、研修 B とする）における研修前後の認知症高齢者に対するイメージの変化をとらえるために、認知症高齢者のイメージを問う自由記述の回答をデータとし、テキストマイニングによる分析を行った。テキストマイニングは、テキストマイニングのソフトウェアである KH Coder を用いて分析を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は研究目的、意義、方法、個人情報 の 徹底管理 の 約束、データを研究目的以外で 使用しない旨を調査対象者に対して口頭にて説明し、同意を得た上で実施した。なお、本研究は日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づき配慮を行った。

4. 研究結果

Jaccard 係数 0.1 以上であることを基準として、受講前後におけるそれぞれの回答を特徴づける語を抽出した結果、研修 A においては研修前に「自分 (Jaccard: .21)」「家族 (Jaccard: .16)」「忘れる (Jaccard: .11)」が抽出され、研修後では、「感情 (Jaccard: .22)」が抽出された。また研修 B においては、研修前に「自分 (Jaccard: .17)」「記憶 (Jaccard: .14)」「忘れる (Jaccard: .13)」が抽出され、研修後では、「物忘れ (Jaccard: .17)」「病気 (Jaccard: .16)」「行動 (Jaccard: .11)」が抽出された。

5. 考察

調査の結果、研修 A においては研修前に「自分」「家族」「忘れる」が抽出され、また研修 B においても「自分」「記憶」「忘れる」とほぼ同様の語が抽出されており、それぞれの受講者の研修前における認知症高齢者のイメージに差はないことがわかる。

次に研修後の結果については、研修 A において「感情」が抽出されたのに対し、研修 B では「物忘れ」「病気」「行動」が抽出された。そして研修 B で抽出された「物忘れ」「病気」「行動」は、いずれも認知症における症状の否定的側面に着目した語りの中で用いられていた。一方で、研修 A で抽出された「感情」については、「脳の変化により認知機能のおとろえた人。感情や尊厳はかわらない」などの回答からわかるように、認知症の症状による否定的側面だけでなく、残された力に着目しつつ、認知症高齢者を肯定的にとらえる語りの中で用いられていることが確認できた。

よって認知症サポーター養成講座にバリデーションに関する講座を組み合わせることは、認知症高齢者に対する介護経験のない者のより適切な認知症高齢者のイメージを形成する上で有効であると考えられる。